

# 映画・書評

## 市川崑のタイポグラフィ 「犬神家の一族」の明朝体研究

小谷充 著

水曜社 / 2625円(税込)



●邦画史上類を見ない卓越したデザインの正体を解く

石井特太明朝体を容疑者Xに、モリサワ見出明朝体を容疑者Yにするなどして「推理」が展開されて行くのを、ニヤニヤしながら読んだ。

庵野秀明の「エヴァ」や三谷幸喜のドラマ『古畑任三郎』のタイトルに影響を与えたという市川崑監督「犬神家の一族」が公開されたのは一九七六年。黒地に明朝体のタテ組ヨコ組を自在にレイアウトしたタイトルを「邦画史上類を見ない卓越したデザイン」として、その「正体」を解き明かす。今までに例のない、映画の中のタイポグラフィの視点から市川崑映画を語っている。

デジタルの時代。文字はフォントと呼ばれるようになり誰もが容易く気軽に使っているけれど、「犬神家の一族」が公開された頃はまだ写植文字。デジタルの時代。文字はフォントと呼ばれるようになり誰もが容易く気軽に使っているけれど、「犬神家の一族」が公開された頃はまだ写植文字。デジタルの時代。文字はフォントと呼ばれるようになり誰もが容易く気軽に使っているけれど、「犬神家の一族」が公開された頃はまだ写植文字。デジタルの時代。文字はフォントと呼ばれるようになり誰もが容易く気軽に使っているけれど、「犬神家の一族」が公開された頃はまだ写植文字。

市川監督が自ら全ての映画タイトルの文字組に関わったかどうかはわからない。しかし六〇年代の「おとうと」や「黒い十人の女」の、シネスコ画面に小さなタイトル文字など、確かに全ての映画がデザイン的に優れていた。それをフィルモグラフィを追って紹介して行くのが面白い。

多くの断片的な分析の後、「犬神家の一族」に辿り着く触媒として、アニメ『ルパン三世』や当時の国鉄の『ディスカバージャパン』のポスターに結び付けたのは少々無理を感じたけれど、『木枯し紋次郎』や後年の作品まで取り上げ、自由になつた筈のデザインが逆に制約されるまでが語られている。いささかデザイン専門分野に話は広がるけれど、あくまでも市川崑へと帰着してバランスは保たれる。図説がふんだんに使われるのも良い。

私も八〇年代からCMやテレビの仕事でずいぶん写植屋さんに無理を言っ、写植を映像の中に使わせてもらっているので興味深い話が多く、写研やモリサワの関係などもこの本で初めて知った。本誌でリメイク「犬神家の一族」の撮影現場を取材した映画評論家の尾形敏朗さんが「市川監督からの年賀状もあの石井明朝体で組んである」とそのコピーを送って見せてくれたのを思い出す。

宮崎祐治